特別賞

東京都立瑞穂農芸高等学校

「私の道」

東京都立瑞穂農芸高等学校
畜産科学科3年　酪農類型　阿部帆波

私は現在18歳の高校3年生。東京の外れにある緑豊かな学校で、牛の世話する毎日を送っている。本校は、つなぎ牛舎で搾乳牛7頭、乾乳牛1頭、育成牛5頭の計13頭のホルスタイン種を飼育している。そして、この小さな牛舎が私の夢の始まりだった。

私は中学3年生の時に本校の体験入学に参加するまでホルスタイン種を見たことがなく、むしろ牛自体に興味を持ったことすらなかった。でも動物が幼い頃から大好きだったので、親の勧めもあって中学3年生の10月に行われた本校の体験入学に参加してみた。そこで、たまたま牛のコースを体験することになったのだが、それが本当に幸運だったと今、振り返ってみるとそう思う。牛舎に入ると白黒のまだら模様にキラキラした瞳が見えた。のんびりと草を食べている牛たち。その仕草にカワイイと思う気持ちと、何と言っても私の何倍もあるずっしりとした大きな体に憧れを抱いたのだ。他の色々な高校を見学してもピンとこなくて内心あせっていたけれど、私はその時確かにピン!とくるものがあり、この高校しかないと感じた。そして幸いなことに希望通り入学することができた。

最初は純粋にただカワイイという気持ちのみを持っていたので、体力的にもかなりきつかった。朝7時から管理が始まる牛舎にたどり着くには4時半には起きないといけない。中学校時代には牛舎の管理が始まる7時にすら目覚めていなかった私。夜型人間で早起きが大嫌いだった。でも親や友達に支えられたりして何とか通えるようになった。牛たちの顔や名前を覚えたり、たくさんの管理を覚えるのが楽しくて、牛たちのことが知りたくて、知りたくて、毎日足を運んでいった。毎日見ているとその牛にしか無い可愛らしい仕草や癖などが見えてきたり、体調の変化に気付くようになると先輩たちから教えられ、同時に毎日見なければ見えてこないものがたくさんあるんだと思った。

私は、一時期牛舎の先輩たちがとても恐かった。体力的にも精神的にもその時はとてもきつかった。でも今になって思うことがある。それは、あの時の厳しさこそ一番大事で、そこから牛や人を思う気持ち、牛を管理することに対する責任感が、養われたのだと私は思っている。そして、あの時の先輩たちの厳しさに耐えきった後、私は一回り大きく成長できた気がする。

2年生になると責任感や精神面、体力が身に付くので、生徒一人一人に1～3頭の牛を担当することができるようになる。私は当時10歳のジュールという牛を選んだ。白がちでい

つも偉そうに人を見下ろしながら乾草を食べている、とても雄大な牛で私を圧倒させるオーラを持っていた。ジュールの格好良さに惹かれたという選び方をした私だったが、平成19年11月2日で12歳になるジュールも未経産の頃に全日本ブラックアンドホワイトショウに出場し、好成績を収めた学校では優秀な牛である。後継牛を作らなくてはと奮闘したものの5産中5産ともオスだった。採卵も2回実施したが、受精卵を採卵することは出来なかった。それ以降も卵胞嚢腫などの繁殖障害に悩まされていた。しかし、私がジュールの担当者になるのと同時にジュールは妊娠した。平成18年2月5日運命の6回目の出産を迎えた。誰もが今度こそメスと願っていた。そして、ジュールはついにメスの子牛を出産した。とても嬉しかった。そして、私はこの親子2頭の担当者になった。子牛はジュリアと名付けられ、今も私は一生懸命、大切に育てている。

ジュールとジュリア。この2頭から私は本当に多くのことを学んでいる。ジュールは、ジュリアを分娩してからも繁殖障害に悩まされ苦労しているが、このことがきっかけで酪農の専門書を読む習慣が身に付いた。日本全国でも問題になっている繁殖障害のこと、乳房炎のこと、飼料のことなど色々な知識を身につけることが専門書を読むことで出来るようになった。しかし、飼料については今も分からない部分が多くて、そのことがとても悔しい。また、ジュールの繁殖障害をとおして、牛群改良や人工授精にも興味を持つようになった。先生や酪農家さんが行っている人工授精の姿はとても真剣で目を奪われるものがある。私はいつも助手をしているのだが、直腸に手を入れてからはその人だけの独自の世界が広がるのが、顔を見ているとよく分かる。このことが私にとっては、本当にうらやましい。私も人工授精の免許を取りたい。自分が付けた牛の子どもがどう成長するか見てみたいし、牛の改良を自分の手でやりたいと強く思う。だから今は、その夢の実現に近づくために繁殖の勉強や繁殖に関係の深い飼料の勉強を頑張りたい。そして、ジュールのように10歳を超えるおばあさん牛になるまで牛たちには幸せで居て欲しいと思っている。だから、長命連産の牧場作りを目指していきたい。これが私の生涯、追い続ける夢であればいいなと思う。

ジュリアは、育成の難しさを教えてくれた。次に私が育成牛の飼育をする時はジュリアでの失敗を踏まえて、よりよい育成管理を行いたい。育成の時期は牛にとっては、かなり大事な時期だと思うので、よりよい環境作りに努め、上手く育成牛を育てることの出来る酪農家になりたい。しかし、なかなか上手くできないのが現実である。また、ジュリアは、ジュールの優秀な血統のお陰で共進会でもジュニアグランドチャンピオンに輝いた経験がある。今年の11月に開催される全日本ブラックアンドホワイトショウでも東京都の代表に選出される可能性が少しだけある。私は共進会が大好きなので、全日本ブラックアンドホワイトショウが待ち遠しい。まず共進会の威圧感と緊張感がたまらなく好きである。自分が出場する部門が近づいてくると恐くて逃げ出したくなる位、心臓がバクバクだ。でも、そんな緊張感を持

ちながらリングに出ると不思議と集中できる。リング内は恐くない。牛を良く見せたいという気持ちだけが頭にあって、他の余計なことは消えている。たくさんの選りすぐりの綺麗な牛たちと肩を並べ、真剣な眼差しでこちらを見る審査員やお客さんの熱い視線の中でジュリアをリードすることはスリル満点。一度経験して楽しいと感じた人は、きっとやめられなくなるだろう。共進会々場での興奮した牛の鳴き声やスプレーの匂い。奮い立ってくる何かがある。大人の真剣勝負とは、きっとこのような空気なんだろう。さらに、共進会は人と人とのつながりを深める場でもある。地域の酪農家さんは貴重なアドバイスを下さったり、リードの仕方を教えて頂いたり、時には酪農家さんの牛をリング内で引かせてもらうこともある。審査員の先生から有り難い評価を頂いた時は、本当に嬉しい。しかし、1番嬉しいのは審査員の先生が自分の牛に良いジャッジをしてくれた瞬間だ。特に最後のチャンピオンを決める瞬間はたまらない。自分の牛に向かって審査員の先生が歩いてくるだけで胸が高鳴る。そして、パンッと牛のお尻をたたかれた時、体の芯から心の底まで奮い立つような喜びがある。やみつきになってしまう。共進会の2ヶ月前から毎日行う厳しかった調教練習もやって良かったと思えてしまう。これからもどんな形であれ、共進会に関わっていきたい。それだけ共進会というものは素晴らしい行事である。

学校では共進会の前日と分娩で宿泊実習を行うのが伝統だが、仲間たちと何か1つの目標に向かって協力し合い、助け合いながら頑張る宿泊実習は得るものが多く、達成感と充実感でいっぱいになる。

しかし、この高校生活3年間、ずっと酪農一筋だった訳ではない。色々なことに悩んだ。少し前までは、酪農とは違う別の道に歩もうと考えていた。でも共進会や人と人とのつながりを大事にする酪農の素晴らしい環境、そして、何よりも牛が大好きになっていた私。このことが、私を酪農の道へと導いてくれた。牛が大好きという気持ちだけは誰にも負けないし、揺るがない。好きだからこそ悩むことがこの先もきっとあるけれど、その壁を乗り越えていきたいと思えるようになった。

この3年間では、牧場や共進会、本校と同じように酪農の勉強を頑張っている他県の農業高校など色々なところを見学させてもらい、多くのことを勉強することができた。色々な牧場を見学させてもらい、酪農家さんと交流することによって、酪農の視野が広がった。それと同時に東京で酪農の勉強ができる本校はとても貴重な学校で、酪農に関する数多くのことを経験できる、価値ある3年間を過ごせる素晴らしい学校なんだと誇りを持てるようになった。私たちの牛舎、牛に誇りを持てるのは、先生のお陰。いつも口だけではなく行動して自分たちのお手本となってくれた。酪農に対する情熱をフル回転で見せてくれる先生はより多くの経験をと、私たちに日々色々なことにチャレンジさせてくれている。そんな先生。一緒に助け合い頑張る仲間、先輩、後輩。カワイイ牛たち。ジュール。ジュリア。温かく見守って

くれたり、アドバイスをくれる酪農家のみなさん。私たちを支えてくれている酪農関係の方々。私は、たくさんの可能性と価値のある経験をさせてくれた方々に出会い酪農という仕事に夢を抱くことができた。これからは、このような方々への感謝の気持ちを忘れずに酪農の道で頑張っていきたい。とにかく負けず嫌いの性格なので、視野を広げて色んなことにチャレンジし、勉強していきたい。勉強すればする程、知識が深まれば深まる程、牛が良くなっていくと信じている。酪農の世界は、日進月歩で新しい技術が生まれる奥の深い仕事。そこが魅力だ。簡単には成功せず、上手くいかない。だからこそ最高に楽しい。私の夢は、そんな未来あふれる酪農を自分なりに極めていきたい。そして、今日も明日もそのために毎日を大事に過ごしていきたい。

「酪農の魅力」

東京都立瑞穂農芸高等学校
畜産科学科1年　小野彩花

私が東京都立瑞穂農芸高等学校の畜産科学科に入学して、はやくも4ヶ月が経ちました。私は、昔から動物が大好きでした。そして、中学3年生の進路を決める際に、この先も動物について学び、将来も動物関係の仕事に就きたかったので、東京都で唯一畜産科学科のある、東京とは思えない程の緑に囲まれ、沢山の種類の動物がいる本校に入学しました。

入学した頃は、小動物が好きでした。従って、部活動もウサギやリスザルなどの小動物を沢山飼育している「動物愛好部」に入部しました。入学した頃は、ウシなどの大動物にはあまり興味を持っていませんでした。しかし、そんな私は、今とてもウシが大好きになり、毎日牛舎に通うようになりました。

私が牛舎に通うようになったきっかけは、「ウシの出産」に立ち合ったことです。私はある用事があって、友達と牛舎に行きました。すると、牛舎内はとても忙しそうでした。なぜなら、丁度「メグ」という乳牛が、子牛を産むところだったからです。私は友達と遠くの方で見学していると、酪農類型の先輩たちが優しく「中に入っていいよ」と声をかけてくれました。そして、私たちは分娩室の中に入りました。1時間経ってもメグの子どもは、なかなか生まれてきませんでした。しばらくすると、だんだんメグの陣痛が激しくなってきました。陣痛が来るたびに先輩が記録をとっていました。そして、どんどん陣痛の間隔が短くなってきました。すると、先生がメグの陰部に手を入れて、子牛の足を引っぱり出しました。すると、少しずつ足が見えてきました。みんなの緊張感がどんどん高まってきました。みんなの会話も減り、とても静かになってきました。先輩が記録をとる音、先生とメグの担当者である竹内先輩が

メグの陰部に手を入れて、引っぱったりする音、12頭のウシが乾燥を食べたり、水を飲んだりする音、メグが苦しそうにしている声、いくつかの音が牛舎内に響き渡っていました。しばらくすると、先生がロープを出しました。そのロープを、さっき少しだけ出てきた子牛の足に付け始めました。そして、ロープの先を鉄パイプに付け、先輩たちがみんなでロープを引っぱり始めました。私は、いつの間にか写真係になっていたので、新しい命が誕生する瞬間を撮るのに必死でした。カメラのレンズの向こう側で沢山の人たちが一生懸命に引っぱっている様子が見えました。私はその時、この東京都立瑞穂農芸高等学校にいる13頭のウシたちは沢山の愛情をもらっているとっても幸せなウシたちなんだなと思いました。メグも本当に沢山の愛情をもらって、この牛舎で分娩を迎えているんだと思いました。メグの顔の横には、必ず人がいて、「ガンバレ!メグ」とずっと言ってくれ、メグが陣痛で苦しんでいる時は、お腹や首、顔などを「大丈夫?痛い?ガンバレ!」などと言いながら、さすっていたりしていました。メグの子どものことを1番に考えながら、みんなの心を1つにして引っ張っていました。これは、他のウシでも同じだと思いました。そのようなことを考えているうちに、どんどん子牛の顔が見えてきました。顔が出た瞬間、みんなの緊張がさらに増してきました。顔が見えると、体もすぐに見えてきました。すると、酪農類型の先輩たちが子牛を抱え始めました。抱えながら足が出て、子牛が産まれると先輩たちがゆっくりと、今産まれてきたばかりの子牛を床におろしました。すると、母牛のメグがゆっくりと子牛に近寄ってきて、一生懸命に子牛をなめ始めました。その光景を見た酪農類型の先輩たちが泣き始めてしまいました。私もとても感動してしまい、泣きそうになってしまいました。私は、今までにウシの出産をテレビで2回程見たことがあります。その時も、とても感動しましたが、今回はその何億倍も感動しました。

しばらくして、先輩たちが子牛の体を拭き始めました。そして、メグの担当者である竹内先輩が、子牛の性別を確認してくれました。先輩たちはみんな「メス!メス!」と祈っていました。しかし、子牛はオスでした。とても残念そうでしたが、笑顔で「元気に産まれてきてくれたから良かった!」と言っていました。学校では、乳牛を飼育しています。オスではなくメスだけを飼育するので、オスは産まれてすぐに、肥育農家さんに売られてしまいます。したがって、産まれたばかりのオス牛は1ヶ月間位しか学校で育てる事が出来ません。

子牛の体を拭いていると、子牛が自分の力で立とうとしていました。するとメグも子牛を立たせようと自分の顔で子牛のお尻を上げたりしていました。その様子を見ていた先生が、「メグと子牛を離す!」と言いました。子牛をみんなで持ち上げて、分娩室から外に出しました。メグは自分の子どもが持って行かれてしまい、ずっと鳴いていました。メグの鳴き声を後に、子牛の体重を測りに行きました。子牛は50kgを超えていました。大体、女子高生の平均体重でした。そして、今度は子牛を外の子牛用の部屋(カーフハッチ)に持って行きました。

床にはオガクズと乾草が敷き詰めてありました。先輩が、私たち1年生に沢山のタオルを渡してくれました。「そのタオルで子牛を拭いてあげて!」と言われました。私の友達で、だいぶ前からウシに一目惚れをして牛舎に毎日通っていた何人かの友達が、子牛をタオルで拭いていました。私はその光景をカメラで撮っていました。すると、先輩と友達が優しく「拭いてみなよ!」と声をかけてくれました。私は偶然牛舎に行き、その時たまたまメグの出産の最中だっただけなのに、毎日牛舎に通っている人たちと同じように分娩の瞬間を見ることができ、毎日牛舎に通っている人たちにとても申し訳ないと思ったのですが、先輩が「こんなチャンスは、あんまりないよ!」と言ってくれたので、私は、子牛をタオルで拭くことにしました。生まれて初めて産まれたばかりの子牛に触って、とてもドキドキしました。触ったら、とても温かかったです。体全体がまだ濡れているのに、毛は生えていて、なんだか子牛ってすごいな!生命ってすごいな!って思いました。メグのお腹の中に1日前までこの子牛が入っていたなんて考えると、とても生命のすごさを感じました。

子牛をタオルで拭いていると、また自分の力で立とうとしました。立ち上がった!と思ったら転んでしまい、また立ち上がった!と思ったら、足が震えてまた転ぶ。この繰り返しでした。何回か繰り返しているうちに、とても震えていた足の震えが少しずつですが、弱くなってきて、立っている時間が長くなりました。まだ産まれて1時間も立っていないのに立つなんて、本当に自然の力ってすごいなと思いました。

メグの搾乳が終わり、メグの初乳を担当者である竹内先輩が持ってきて、子牛に飲ませました。とてもおいしそうに初乳を飲んでいる子牛はとても可愛かったです。

子牛の名前は「ゲンジ」になりました。ゲンジという名前は竹内先輩が”元気に育って欲しい”と思って付けた名前です。名前の由来どおり、ゲンジはメグの牛乳を沢山飲み、とても元気な子牛に育っていきました。

私はメグの出産を通して、”命の大切さ”というものを学ぶことが出来ました。牛舎に用を伝えに行ってまだ数時間しか経っていないのに、ウシに対する気持ちが大きく変わりました。ウシを見るたびに、メグの出産の光景が思い浮かんできます。私はいつの間にか、ウシに興味を持つようになりました。そして私は、いつの間にかウシのことが以前よりも、もっともっと好きになっていました。

私は、ゲンジが産まれて1週間後にウシについて学びたい!と思い、牛舎に通うことを決意しました。朝5時に起き、5時半過ぎの電車に乗り、7時から朝のミーティング、牛舎管理をした後、8時55分から授業をして、15時20分に授業が終わり、また牛舎に行き、午後の搾乳管理をして、17時に学校を下校して、19時30分頃に帰宅する。そして、また5時に起床する。このような生活が始まりました。私は、牛舎以外でもポニーの世話と平飼い養鶏の部活動をやっているので、とても疲れてしまい、イヤになることも沢山ありました。しかし、今、

私が牛舎を続けることが出来たのは、沢山の可愛いウシたち、優しく色々なことを教えてくれる先輩、そして先生、同じクラスの仲間のお陰だと思います。酪農を通じて”仲間の大切さ”も学べました。

私はこれからも、牛舎に通い、2年生からは酪農類型に入ろうと思っています。そして、先輩たちのような「ウシを大切にする想い」「ウシを愛する想い」などの大切なことを引き継いでいきたいと思っています。

私はまだ将来のことはよく分かりません。大学に行くのか、専門学校に行くのか、就職するのか、それさえも分かりません。もちろん、酪農家さんになるのかも分かりません。今は、目の前にあることを一生懸命頑張ろう!といつも思っています。私にとって今、目の前にあるもの、それは”ウシ”です。これから、ウシについて色々なことを勉強していきたいと思っています。

そして、将来酪農家になるのであれば、小さい子どもからお年寄りまで、多くの方々に”命の大切さ”と”ウシのありがたみ”などの大切なことを教えられるような明るい酪農家さんになりたいです。

私は、これからの高校生活を牛舎に通い、ウシについて少しでも多くの知識を得て、色々な経験をして、人間としても大きく成長していきたいと考えています。

”命の大切さ”はウシの出産や淘汰を経験して、勉強することが出来ました。だから、ウシが「産まれてきて、本当に幸せだった」と思えるように、ウシの飼育管理を頑張り、ウシを愛していきたいです。

これからも、「ウシを愛する心」「ウシを大切にする気持ち」を忘れずに、東京で酪農の勉強を頑張りたいと思っています。

「青春モーモー」

東京都立瑞穂農芸高等学校
畜産科学科1年　高良美香

私は今、東京都立瑞穂農芸高等学校の畜産科学科で酪農について学んでいます。本校では、ホルスタイン種の成牛と子牛を合わせて13頭飼育しています。搾乳はミルカー2台とバケットミルカー1台で現在は、7頭搾っています。牧場とは異なり、大規模な施設とは言えませんが、毎日の管理や朝、夕の搾乳は生徒が行い、共進会に向けての練習や分娩実習、牧場実習など生徒一人一人が真剣に勉強へ取り組んでいます。

毎日の管理は、朝7時からのミーティングから始まって牛床や通路の清掃、エサ作り、ミルカー類の殺菌など基本的な作業から、2年生になると持てる担当牛の細かい個体管理

まで様々な作業をしています。牧場などではありえませんが、本校では勉強のために、生徒一人一人が自分の好きな牛を担当牛として世話をすることができます。担当牛の調子が悪くなったら、先生と相談して薬や栄養剤を飲ませたりします。また、担当牛の分娩実習では出産の面倒を見たり、子牛の命名をしたりします。

そもそも私が酪農を学ぶようになったのは、高校に入学してすぐに遊び感覚でなんとなく牛舎へ見学しに来たのが、きっかけでした。最初は、豚舎や育すう舎へ遊びに行ったついでに軽い気持ちで牛舎の中へと入って行っただけなのですが、入った途端、一列に並んでいる大きな成牛たちが目に入ってきて、そのすごい迫力と、スケールの大きさにとても驚きました。最初は、その大きさが少し恐ろしくて、そのまま帰ろうかと思いました。しかし、管理をしていた先輩が牛舎を案内してくれたり、今何の作業をしているのか教えてくれたりして、「結構楽しそうだな」と思いました。色々と見て回ったりしているうちに、少しずつウシたちにも慣れてきて、ほとんど恐さを感じなくなっていました。先輩たちもみんな優しくて、忙しい中、ブラッシングまでさせてくれました。やり方や注意することなどを教えてもらい、その時に触った温かい体と私の方に何度も振り向いてきた顔、真ん丸い目がとても印象的で、そのことがきっかけで牛舎へ通う毎日が始まりました。

いざ、初めての管理を経験した時、眠さや疲れ以上に”楽しい”という気持ちと”もっとウシのことについて知りたい”という気持ちの方が強くて、酪農に興味を持つようになりました。牛舎に通い始めたばかりの頃は、将来は動物園で働きたいと思っていて、ウシと接するのは高校三年間だけのつもりでした。ところが、少しずつ色々な作業をやらせてもらえるようになっていくうちに、酪農経営にも関心を持つようになりました。今では、牧場で働きたいと思うようになりました。

私が牛舎に通い始めて、約4ヶ月が経ちます。その4ヶ月の中で、特に感動的だったのが、出産です。たまたま、運良くウシのお産に立ち合うことができた時、テキパキと動いている先輩たちと、普段とは全く違った様子でそわそわしていた母ウシとを、ただ呆然と眺めていたのを覚えています。バタバタしていて、張りつめた空気の中、私は何をすればいいのか分からなくなって、とても混乱していました。しばらくしてから先生に促され、やっと産室へ入りました。状況が分からないまま、なぜか記録係になってカメラを握って、必死に出産の経過を撮していました。産室の中は、静まり返っていて、陣痛の間隔を用紙に記入する音と時々聞こえる先輩たちの掛け声、母ウシの苦しそうな息づかいしか聞こえてきませんでした。そのまま、しばらく経って、ようやく子牛の足が見えてきました。何度か手で引っ張ったり、様子を見たりしていたのですが、ついに子牛の足にヒモを巻き、みんなで引っ張ることになりました。その少し前から、私はなぜか記録係から母ウシの顔を押さえる係になっていて、子牛が産まれる瞬間、私は母ウシの顔の横に居ました。ただ必死になってモクシを握って

いると、後ろの方で友達や先輩たちの歓声が聞こえてきました。ドキドキしながら、後ろを覗き込んでみると、タオルに包まれ、鼻や口を拭かれている真っ黒な子牛が目に入ってきました。私は友達と”うわ、何コレ、可愛い!”と感動していました。ところが、それと同時に、先輩の「オスだ・・」という悲しそうな声も飛び込んできました。牛乳を搾ることのできないオスは、いずれは肉にされてしまいます。そのため、一緒に過ごすことができるのは、出荷されてしまうまでのほんの少しの時間だけです。自分の子牛を必死になめ続ける母ウシと、「無事で元気に産まれてきてくれて、本当に良かった」とホッとしている先輩たちを見ていると、いずれ肥育農家へ出荷されてしまう子牛が、すごく可愛そうで、悲しくて仕方ありませんでした。何とも言えない微妙な気持ちのまま、その子牛との毎日は始まりました。その日から毎日を一緒に過ごして、先輩にブラッシングや散歩をさせてもらったりして、成長するのを見たり、一緒にいれば居るほど「もう少しで居なくなる」という現実を認めたくなかったのですが、毎日、一生懸命に世話をしている先輩を見たり、色々な人の話を聞いたりしていくうちに、”出荷しなければいけない”理由も分かり、出荷することを理解することができました。初めて経験したウシの出産は、とても良い思い出になり、酪農の厳しさや現実を知るきっかけにもなりました。ウシの出産を通して、色々な勉強をすることができたと思います。

私の将来の夢である酪農家。私が酪農家になることができたら、絶対に持ち続けたい目標があります。それは、”幸せなウシを育てる”ことです。もちろん、ウシは「家畜」であり、愛玩動物ではありません。売り上げを出さなければ意味がなく、経営をしていく上では、妥協しなければいけないこともたくさんあると思います。でも、ただの「商売道具」としてウシを見て、「牛乳さえ取れれば別にどうでもいい」という人にだけはなりたくないと思っています。家畜であるウシは、牛乳が出なくなったり病気が治らなかったりすれば、淘汰するしかありません。それまでの短い間、「幸せだった」と感じてもらえればいいな、と私は思っています。

入学式から、約4ヶ月。私は今、「自然卵」と「動物愛好部」、「牛舎」の3つを両立しています。「自然卵」というのは、放し飼いの鶏の飼育をする有志のグループで、「動物愛好部」は、主にチンチラやリスザル、インコなどの小動物の管理や親子ふれあい動物教室などを開催する部活動です。どれも生き物に携わることなので、残酷なところもあり、責任が重いところもあります。例えば、つつかれて内臓を引っ張り出された鶏は、治療せずに処分になります。ウシの世界と同じように、利益のでないものは切り捨てるしかありません。もちろん勝手な理由で休んだり、半端なやり方で管理をすることもできません。この高校三年間で、色々な生き物や飼育方法に触れて、将来に役立てることができれば良いと思っています。

学校と牧場さんでは、大きく環境が違っています。先日、牧場へ実習に行ける機会があったのですが、搾っている頭数やミルカーの台数も多くて、子牛の数も学校より多くいました。現在、学校で牛乳を搾ることができるのは、全部で7頭です。搾乳にかかる時間も30分程

度で終わってしまいます。また、生徒が搾っているため、時間の問題で搾乳と搾乳の間の時間も理想的ではありません。しかし、良いところもあります。搾る頭数が少ない分、後搾りやマッサージなども徹底してやることができます。また、飼槽や床などの清掃も大人数で毎回の管理でやるので、牛舎の清潔さや衛生面では、しっかりと保つことができています。また、課題研究という授業などで様々なことを試してみたり、色々な牧場へ見学に行ったりして、数多くのことを勉強することができます。学校には、ラウンダーも設置してあり、主に子牛を毎日のように回しています。共進会は、まだ見たことがないのですが、先輩方や先生が試行錯誤しながらも一生懸命、共進会へ向けて練習をしたり工夫をしたりしているのを見て、私もいつか共進会に出てみたいと思っています。

日々、ウシたちの世話や管理をしている中で、特に勉強になっていると感じるのが、人工授精です。生徒自らが、発情予定日などを計算したり、発情だと判断したりして、2・3年生の先輩が、自ら膣鏡を陰部へ入れたり、器具の準備をしたりして、先生の指導のもとで精液の注入も教えてもらったりしています。自分も来年になったらコレをやるのかと思うと不安もありますが、楽しみでもあります。まだ、種付けから出産までの流れを見たことがないので、これからがとても楽しみです。

私は、まだ自分が何をやりたいのか、よく分かりません。専門学校を目指したいのか、高校を卒業したら、そのまま牧場へ就職したいのか、それとも農業大学校に入学して、もっと酪農について勉強したいのか。しかし、前にも言いましたが、毎日ウシと接しているうちに、最近では「やっぱり自分は酪農家さんになりたいのかな」と感じるようになってきました。とりあえず今は、何よりも大好きなウシのことについて、もっと勉強して、酪農について学ぶことに全勢力を費やしてみようと思っています。もし、今後自分の夢が「酪農家さん」から遠のいてしまうとしても、自分が勉強していることや毎日の牛舎管理で身につけることができる持久力や集中力、仲間との協調性は、絶対に無駄にはならないと思います。これから自分がどうなっていくのか、また酪農業界がどうなっていくのかは分かりませんが、少しでも”幸せなウシ”が増えていって欲しいと思っています。そして、いつか自分がウシの世界に携わることになったとしたら、精一杯”幸せなウシ”をサポートしていきたいと思います。これからも牛舎での勉強を頑張ります。